

渡辺 美季

I 琉球人行列と江戸

1. 『日本近世生活絵引』琉球人行列と江戸編とは

『琉球人行粧』⁽¹⁾ 2巻および『琉球人往来筋賑』⁽²⁾ 之図（巻中の記載は『琉球人往来筋賑之図』）1巻は、『中山使聘礼之図』⁽³⁾ とも総称される全3巻の絵巻である。江戸勤番中の宇和島藩士・上月行敬が、1850年（嘉永3・道光30）に参府した琉球人の使節行列と行列通過前後の町の様子などを描いたもので〔丹羽2017〕、近世期の日本の人々の生活文化の一部であった「行列および行列を迎える都市空間の様相」を分析・研究し得る好素材である。また同時に『日本近世生活絵引』の第二期（2011-2013年度、奄美・沖縄編）・第三期（2015-2016年度、南九州編）の研究蓄積を発展的に継承し得る、希有にして貴重な素材でもある。そこで第四期共同研究（2017-2019年度）では、「人々の日常生活を図像資料から引き出して、特定の過去を知る手がかりとする」〔福田2007〕という生活絵引の編纂目的にも鑑み、この絵巻3巻を用いて『日本近世生活絵引』琉球人行列と江戸編を作成することにした。

本絵巻の原本のうち第2・3巻は、それぞれ『琉球人行粧之図』・『琉球人往来筋賑之図』の表題にて鹿児島大学附属図書館に所蔵されている。残念ながら第1巻は所在不明となっているが、幸いなことに1915年（大正4）に、鹿児島の新納榮⁽⁴⁾なる9才の少年が作成した全巻の写本が鹿児島県立図書館に『琉球人行粧之図』の名称で所蔵されている〔丹羽2017〕。このため第1巻に関してはこの写本を用い、第2・3巻に関しても適宜参照することにした。またあわせて本絵引の内容を補うような地図・絵図を選定し、参考資料として収録した。

2. 「行列の時代」の琉球使節

日本の近世は、参勤交代に代表される武士の行列から、城下町における祭礼行列、各地各所の嫁入り行列や葬送行列に至るまで、大小様々な行列が定期的／日常的に往来する「行列の時代」であった〔トビ2008、国立歴史民俗博物館2012、久留島2015〕。この時代を特徴づける行列の一つが、朝鮮・琉球の国王から派遣された異国（外国）の使節行列である。それは幕府にとって、將軍の御威光が広く異国にも及んでいるという「事実」を国内に喧伝する絶好の機会であり、このため島津氏の配下にあった琉球はもちろん、形式的には対等の関係にあった朝鮮からの使節も、將軍への「朝貢」使節として演出された〔トビ1990〕⁽⁵⁾。

ただし琉球使節に関していえば、派遣を主導したのは幕府よりもむしろ薩摩藩であり〔豊見山2004〕、幕府自身が使節を「日本の御威光になる」と意義づけたのも、18世紀初頭に同藩が行った働きかけの結果であった〔紙屋1990a〕⁽⁶⁾。薩摩藩にとって、琉球使節を率いての参府は、異国を支配する唯一の藩であることをアピールし、幕府との諸交渉を有利に進めたり、幕藩制内における自藩の地位向上（具体的には藩主の官位昇進）を図ることに繋がっていたのである。⁽⁷⁾

琉球使節（慶賀使・謝恩使⁽⁸⁾）の江戸参府は、近世を通じて18回行われ（17回とする説もある）、最大で30年も間が空くことがあった。朝鮮通信使（初期の回答兼刷還使も含め計12回来日）とあわせても、異国の使節渡来は平均して十数年に一度であり、「鎖国」状況の展開とも相まって、それは極

めて珍しい「見世物」となった⁽⁷⁾。しかも通信使が江戸まで来たのは11回目の1764年が最後であったため(12回目は対馬止まり)、以後、日本人が実際に目にするのできる異国人は琉球使節にほぼ限定されることとなり、必然的に人々の琉球使節への関心が高まった。

こうした状況下で、使節参府の際には、行列や琉球の概要を紹介するガイド的な出版物(いわゆる「琉球物」)が多数刊行されるようになる。特に1832年(天保3)の参府の際には、出版文化の成熟とも相まって、「琉球物」の総数の約3分の1が刊行されるほどの「琉球ブーム」が巻き起こった[横山1987]。ただし刊行数こそ多かったものの、そこに含まれる情報の精度は必ずしも高いものではなかった。使節渡来前に急ごしらえて刊行する必要性から、しばしば以前の刊行物が使い回されたし[横山1987](本書IV-10参照)、琉球と日本の間のヒト・モノの移動は薩摩藩が独占的に統制していたことから[真栄平1993、豊見山2003]、同藩の「外」で得られる琉球情報(=「琉球物」に反映される情報)はそもそも極めて限られていたのである⁽⁸⁾。

もちろん「琉球物」のみならず、実際の使節行列も大いにもてはやされた。使節行列の沿道には遠方からも見物人が詰めかけ、有料の棧敷(見物席)も設けられた(本書IV-8参照)。参府の様子は各地で「名物・名所」化したと見られ、『東海道名所図会』(秋里籬島編、1797年刊)・『撰津名所図会』(同前、1798年刊)・『尾張名所図会』後編(岡田啓・野口道直編、1880年刊)⁽⁹⁾などの名所図会にも絵入りで紹介されている。また近世末期に盛んに作成された安価な泥絵——江戸土産の一つであった——でも、寺社や大名屋敷といった江戸名所とともに琉球使節の登城風景をモチーフとしたものが確認できる(本書IV-7参照)。

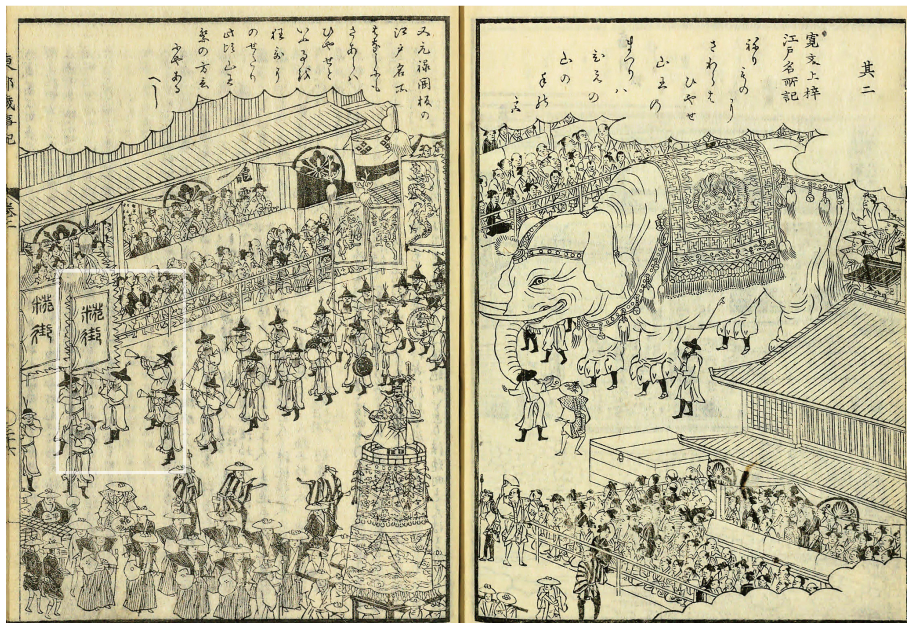
一方で、近世において異国の使節行列は、「唐人行列」や「唐人踊り」などの形で、江戸をはじめ各地の城下町における祭礼行列(練物^{ねりもの})の出し物とし

て取り込まれた[トビ1988、黒田・トビ1994、トビ2008]。その多くは朝鮮通信使のイメージに基づき、チャルメラ・つば広の帽子・付け髭・旗(通信使の「清道旗」・「形名旗」)などを用いた仮装を特徴とするが【図1】、琉球使節を模したものも確認できる【図2】。また飴や菓など異国と関わりの深い商品⁽¹⁰⁾を扱う物売り(行商人)も、好んで「唐人」の仮装(=朝鮮通信使「風」の格好)をするようになり【図3】、より日常的な存在として人々の生活に根付いていった[黒田・トビ1994、トビ2008]。

横山學氏の指摘によれば、朝鮮通信使の渡来が途絶え、その記憶が薄れるにつれ、琉球使節との「区別」意識が低下し、両者とも異国人の総称である「唐人」として漠然と捉える傾向が強まったという[横山2017]。そうした意識の展開には祭礼行列や物売りの「唐人」パフォーマンスの存在も一役買っていたかもしれない。“何でもあり”のそれらの仮装では、朝鮮人か琉球人かの区別は重視されず、ただ「唐人(異国人)」風に装うことだけが最低限の条件であった。

そして人々の意識のなかでは、滅多に來ない本物の「唐人」に代わって、より身近で頻度の高い「唐人」パフォーマンスが、異国人イメージの源泉となっていた可能性も指摘できる。ロナルド・トビ氏が紹介する^{ももくりさんじんかきはっさい うていえんば}桃栗山人柿発齋(鳥亭焉馬)の咄本^{さとそだちはなしすずめ}『青楼育咄雀』(1793年刊)の小咄「りうきう人」に見られる「琉球使節を見物してきた遊廓の客に遊女が感想を尋ねたところ『豊島町の祭りの唐人(神田祭の出し物の一つ)の方が立派だ』と答えた」というエピソードは、その傍証の一つといえるだろう[トビ2008]。

こうした「行列の時代」のなかで——それも終盤に差し掛かった頃——、上月行敬は琉球使節の参府行列を描いたのである。



【図1】 斎藤月岑編『東都（江戸）歳時記』（1838年刊）巻2「山王御祭礼 其二」
（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより）[請求記号：121-85]



部分

左図は江戸の山王祭で麴町が出した「朝鮮人來朝のねりもの」と「大なる象の造りもの」。「世に名高し」と記されている。象は、享保13年（1728）に長崎経由でベトナムから輸入され、翌年將軍吉宗に献上されたものに由来するとみられ、通信使とは無関係だが「異国」風の出し物のなかで合体された。象の足に人が入って動かしている。（以上は〔トビ2008〕による）



【図2】 猿猴庵（高力種信）『猿猴庵随観図絵』（1820年）
（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより）[請求記号：特7-59]

【図3】 橋本養邦『江戸年中風俗之絵』巻1（江戸時代後期）より唐人飴売り
（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより）[請求記号：す-17]

上図は明和9年（1772）5月18日に名古屋の大須観音で行われた祭礼「馬の頭」（大須奉納馬の頭）の競子（練物）。右下に琉球人行列が描かれ（「至って美々しく見ゆ」とある）、ほかに朝鮮人行列もあったことが右上に記されている。なお猿猴庵『名陽旧覧図誌』（1820年、公益財団法人東洋文庫蔵）巻4にも同祭礼における両使節の競子が描かれている。（以上は〔横山2017〕による）



3. 嘉永3年(1850)の琉球使節

3-1 使節の概要

嘉永3年(1850)に江戸に参府した琉球使節(以下、嘉永3年使節と略記する)は、琉球国王尚泰(1843-1901)の謝恩使(恩謝使)である。その後の参府は中止されたため、結果的にこれが最後の琉球使節の江戸参府となった〔紙屋1990b、ティネッコ2017〕。そして1879年(明治12)、明治政府が断行した「琉球処分」によって、琉球は日本に併合された。

嘉永3年使節の派遣の経緯は概ね次の通りである。1847年(弘化4)9月17日、尚泰の父親である国王尚育が死去し、翌年5月、薩摩藩島津氏の認可を得た上で、嗣子尚泰が6歳という若さで王位に就いた(『尚泰侯実録』)。謝恩使の参府は、その後まもなく決定されたとみられ、1848年(嘉永1)9月1日には、楽正・楽童子が選任されている⁽¹¹⁾。これらの役職は、音楽や舞踊の練習のため、最も早期に任命されていた〔沖縄県文化振興会2001〕。

また1849年5月に琉球から薩摩藩へ派遣された年頭慶賀の使者である識名親方(向朝頭)が、参府のため借銀8千両を認められたことを謝している(『中山世譜附卷』巻7)。藩は1794年以降、琉球使節の参府のため幕府から金1~2万両/米1万石の借金を許されており、この時の借金は1万両であった〔紙屋1990a〕。

使節の正使・副使に任じられたのは、玉川王子(尚慎〔朝達〕)と野村親方(向元模〔朝宜〕)である。玉川王子は25歳で、前々国王尚灝の第6子、尚泰の叔父であった。使節は、この正使・副使を筆頭に、讃議官・楽正・儀衛正・掌翰使各1名、正使使讃5名、副使使讃2名、楽師5名、楽童子6名など総勢99名で〔横山1987〕、6月に那覇から鹿児島に移動し、そこで2カ月ほど過ごした後、薩摩藩主島津斉興(1791-59)の一行とともに江戸へと向かった(当時、嫡子斉彬は江戸にいた)。その旅程は概ね【表1】の通りである⁽¹³⁾。また

【表1】嘉永3年使節の旅程

嘉永3年(1850)
5月6日: 使節乗船
6月2日: 那覇港出港 (→山川港へ)
6月10日: 陸路で鹿児島へ到着
8月21日: 鹿児島を出発
10月30日: 江戸へ到着
11月19日: 登城1回目(進見の儀)
11月22日: 登城2回目(奏楽・辞見の儀)
11月27日: 上野東照宮へ参詣
12月12日: 江戸を出発
嘉永4年(1851)
2月17日: 鹿児島へ帰着
4月13日: 琉球へ帰着

楽童子のおろくサトヌシ小禄里之子(馬周詢)の家譜からも、その参府日程を【表2】にまとめた。

江戸における登城および将軍への謁見は、通常、進見の儀・奏楽の儀・辞見の儀として3回行われたが、嘉永3年使節は『徳川実紀』に「(嘉永三年)十一月廿一日、琉人音楽御聴聞あり。かつ御暇下さる」とあり、奏楽の儀と辞見の儀をあわせて実施したとみられる。このため登城は2回のみであった。

なお使節人員のうち、儀衛正のたかみね高嶺親雲上(魏国香)が嘉永3年10月22日に往路の浜松で、正使従者のとくぐち渡久地親雲上が同12月28日に復路の草津で病死し、それぞれ西見寺(静岡県浜松市)、正定寺(滋賀県草津市)へ埋葬された。西見寺には墓石が現存している〔古塚1993、沖縄県文化振興会2001〕。

3-2 首里王府と使節参府

嘉永3年使節に関しては、その正使・副使に対して1849年(嘉永2)4月19日に首里王府の最高首脳陣であるせつせい摂政・三司官が連名で発布した訓令がある⁽¹⁴⁾。これについてはすでに別稿〔渡辺2012〕にて詳述したが、江戸への使節派遣に対する王府の姿

【表 2】 楽童子小祿里之子の参府日程

※青字は楽正伊舎堂親雲上の家譜より補った。

1848	9月	1日	国王の即位を謝するため（正使の）尚氏玉川王子朝達が江戸へ赴く時の楽童子を命ぜられ、若里之子の位に叙せられた。この時、国高祖母から使者をもって御玉貫1双を賜った。
1850	4月	5日	聞得大君宮・三平等神宮を参詣した。この日、国祖母・国母より使者をもって御玉貫1双を賜った。
	〃	23日	百里城南殿にて奏楽し、国王の御覧に呈す。
	5月	3日	国王から饗宴（はなむけの宴）を賜り、金入錦大帯1筋を下賜された。
	〃	6日	乗船した。
	6月	2日	那覇港を出航した。
	〃	5日	山川港に到着した。
	〃	8日	陸路で山川を出発した。
	〃	10日	鹿児島に到着した。
	7月	1日	王子に随行して太守公（藩主斉興）に朝覲した際、寿帯香3箱を献じた。
	〃	3日	王子が太守公に御膳を進上した。
	〃	9日	筵宴（酒宴）を賜った（その際に囃子と狂言【御能と狂言】を鑑賞した）。
	〃	17日	大雄山宮・南泉院を参拝した。
	〃	19日	御本丸の外庭にて盛宴および夏見燈爐3個・絵半切紙1箱を賜った。
	〃	21日	儀御屋敷で御庭を鑑賞した際、筵宴を賜り、美巾2個・楊枝差5個・袂落2通・札入3個・女煙草入2個・作花2個・腰形煙草入2個・様杯2個・折部形煙草入1組・幾世留（キセル）2個・煙袋2個を下賜された。
	〃	25日	二丸御屋敷にて漢字を書いて上覧に呈した時、広幅帯地1筋・団羽扇子5本と盛宴を賜った。
	8月	1日	諏訪宮を参拝した。
	〃	7日	御本丸にて音楽と童子躍を行った。
	〃	9日	聖堂・神農堂を参拝した。
	〃	10日	福昌寺・浄光明寺を参拝した。
	〃	21日	出発し江戸へ赴く途中でしばしば太守公から物件を下賜された。
	〃	23日	（川内の）向田に到着した。
	〃	26日	（向田を）出航した。
	〃	27日	（川内川河口の）久見崎に着いて乗船した。
	〃	30日	出航した。
	10月	7日	大坂（の港）へ到着した。
	〃	9日	薩州公館（薩摩藩蔵屋敷）で御能を鑑賞した。
	〃	12日	伏見に到着した。
	〃	15日	（伏見を）出発した（これより陸路である）。
	〃	30日	江戸の芝御屋敷に到着し、太守公・少将公（斉彬）に拝して筵宴を賜った。
	11月	2日	礼儀・音楽の演習を行った。
	〃	8日	芝御屋敷で漢字を書いて上覧に呈した（この時音楽【御座楽】を奏した）。この日、太守公から嶋縮緬1端（反）を賜った。
	〃	11日	再び礼儀・音楽の演習を行った。
	〃	12日	外御庭を鑑賞した際、太守公より筵宴と御掛物1幅・錦絵1箱を賜り、少将公から八丈嶋2端・錦絵1箱を賜った。
	〃	19日	王子に随行して登城し將軍に朝覲した【※進見の儀】。同日、太守公より筵宴を賜った。
	〃	21日	再び礼儀・音楽の演習を行った。
	〃	22日	王子に随行して帰国の暇乞いをした（この時音楽【御座楽】を奏した）【※奏楽兼辞見の儀】。この日、公方様（將軍）から筵宴と白銀403銭・時服2枚・熨斗目1枚を恩賜された。
	〃	24日	芝御屋敷にて越後嶋1端と盛宴を賜った。
	〃	27日	上野宮（上野東照宮）を参拝した。
	12月	3日	芝御屋敷にて、御前様（側室由羅）から錦絵30枚・絹煙草入2組・女煙草入4個・扇子2本・人形1個・様杯1個・札入8個・楊枝差15個を賜り、太守公から金子2歩と盛宴を賜った。
	〃	5日	芝御屋敷にて筵宴と金子2歩を賜った（この時、漢戯【唐躍】・球舞【琉躍】を行った）。
	〃	7日	芝御屋敷にて金子2歩と盛宴を賜った（この時、音楽【御座楽】を奏し、漢戯【唐躍】・球舞【琉躍】を行った）。
	〃	8日	漢字を書いて御前様に進呈した時、絵半切紙1折・蝶形1個・様杯1個・玉柄筆1対を賜った。
	〃	9日	太守公・少将公から御文庫2個（内に数件を蔵す）を賜り、少将公から人形3個・美巾1個・袂落1個・巾着1提・絹煙草入1組・絵紙10枚・寄喜屋嶋1端を賜った。
	〃	10日	御前様から板責縮緬巾1筋を賜った。公務が全て終わった。
	〃	12日	江戸を出発した。
1851	2月	17日	鹿児島に帰着した。
	3月	5日	乗船した。
	3月	15日	鹿児島を出航して同日山川港に着いた。
	4月	4日	（山川港を）出航した。
	4月	9日	帰国し復命した。

勢が明示された貴重な史料であるため、ここでもその概要を紹介したい。

まず訓令の冒頭部を訳出すると次の通りである。

御当国は小国だが昔から唐・大和との通融が続いており、特に江府（幕府）へも折節についての御礼節（参府）があるので、御外聞（国の評判）は軽くない。先年から続く江戸への使者派遣の際にも、万端神妙にしたために和朝（日本）の聞こえ宜しく讃嘆されたとの由、この上もないことである。今回もいっそうその心得をもって、下々の者までその嗜みを持つよう堅く申し渡すべきである。このため心当たる旨を頭書によって申し達するものである。以上。

西四月十九日

池城親方（三司官）

座喜味親方（〃）

国吉親方（〃）

浦添王子（摂政）

玉川王子（正使）

野村親方（副使）

すなわち、琉球は小国だが中国・日本との関係を有することにより御外聞（国の評判）は「軽くない」とした上で、使節人員に対して、従来の江戸参府では良い御外聞を維持してきたので、今回もそれを意識した行動を取るよう求めているのである。

これに続いて11カ条の頭書が記されるが、そのうち、使節の行動を具体的に指示した第3～5条は次の通りである。

③一、総じて立居・歩行の拳動、かつまた食事の食べ方などまで、日本の格式ではなく唐風めくように嗜みなさい。

附。唐風めくといっても下々の者どもは心得違いをするだろうから、無作法にしないようにと堅く申し渡しなさい。

④一、上位から下位の者まで何事も卑しい様子ではなく、柔和に見えるようにするのがよい。とはいえ下々の者どもは心得違いをするだろう

から、尾籠（無礼）にしないようにと堅く申し渡しなさい。

⑤一、琉装束（琉球衣装）は幅狭袖短のものは見てくれが宜しくないと先年示達されたことがある。いっそうその心得をもって準備するよう末々の者まで必ず申し渡しなさい。

附。形付（紅型）衣装は大和めいていて宜しくないの着用は控えること。

つまり良い御外聞のためには「礼儀に叶った柔和な態度」がよしとされ、わけても拳動・作法において「唐風めく」こと、および「大和めいた」琉球衣装を着用しないことが指示されている。なお琉球において最も格式の高い正装は唐衣装（明風の官服）であり、使節のうち身分の高い者は唐・琉球衣装を併用していた〔豊見山 2003〕。

中国風を推奨し日本風を禁じるという点に関しては、薩摩藩が1709年（宝永6）に琉球使節に関して日本風の宿幕の使用を禁じ、長刀・鎗・雨具などの諸道具を中国風とするよう指示しており（『旧記雑録』追録2、2861号）、同藩の何らかの影響があったことがうかがえる。しかし薩摩藩は、ふるまいや服装の「中国風」までは求めていない〔豊見山 2003〕。

このことを踏まえた上で、一部の使節人員に対して、より具体的にその行動を指示した第6・7・10条を見てみたい。

⑥一、楽童子は、晴立たる（晴れがましい）御座へ毎度召し出されるので、普段通りの風情を心得ることが第一である。時により手跡の御望がなされた際に、辞退したり整わない文句などを書いたら、特に風流のないことである。このようなことまでもあらかじめその心がけをするよう、入念に指南しておきなさい。

⑦一、音楽は、和朝において殊のほか感服されるという。いかにも江戸立（江戸参府）の「第一之粧」であるので、よくよく音律の節度（程合い）を究め、熟練するように下知を加えなさい。



【図4】『琉球人舞楽御巻物』（19世紀）より（沖縄県立博物館・美術館蔵）

熊本藩絵師杉谷行直による『琉球人坐楽之図』（永青文庫蔵）の写本の一つ。1832年（天保3）の琉球使節が、閏11月22日に薩摩藩白銀邸（前藩主斉宣邸）にて楽童子らが奏楽・席書を行う様子が描かれる。左手前の障子の後ろに斉宣がいて、楽童子が茶を運んでいる。（以上は〔板谷・金城・細井 2011〕による）

⑩一、久米村人も先例通り参府させる。先年名護親方（程順則）⁽¹⁶⁾を参府させた時には、江戸で書跡・詩作などの作成を命ぜられ、懇切に応じて非常に讃嘆され、和朝での評判が宜しかったという。この節もますますこのような御用があるだろうから、十分その心得をし、御用の際にはふさわしい対応をして、国の名折れにならないよう、申し渡すべきである。

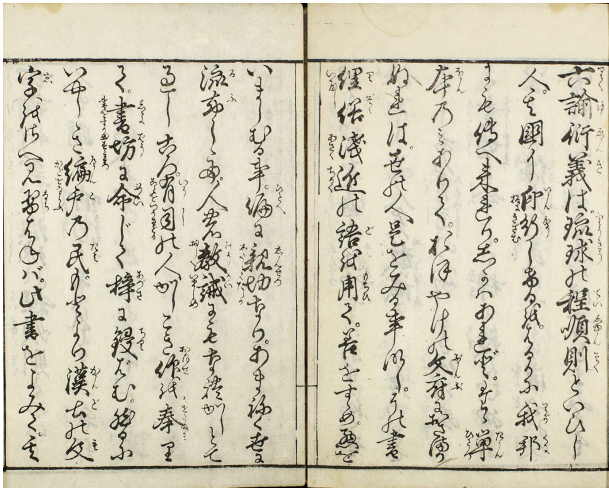
ここでは楽童子など奏楽担当者と久米村人（後述）に対して、日本側から所望される手跡・書跡・音楽・詩作に関して入念に備えることが指示されている。手跡・書跡は主に中国風の書を指すと考えられ、⁽¹⁶⁾詩作は漢詩、音楽（路次楽・御座楽）は主に明清楽であることから、総じて中国文化を主とする教養の発揮が求められているといえよう。よく知られているように、使節参府の際にはしばしば沿道各地や江戸において大名・公家・学者・文人などとの直接／間接的な文化交流が行われていた〔宮城 1982〕⁽¹⁸⁾【図4】。

注目すべきは第10条である。ここに見えるクニンダ／くめむら久米村人とは、久米村という行政区画（現在の那覇市の一角）に戸籍を持ち、王府の中国外交と中国的な学問・思想・文化に関する文教政策を専門的に担う士（士族）⁽¹⁹⁾たちを指す。その多くは近世以

前に主に福建から渡来した華人の子孫で、「閩人（福建人）三十六姓」⁽²⁰⁾などと総称された。

名護親方（程順則、1663-1734）は、その久米村人の1人であるが、華人の子孫ではなく、いわゆる「琉球人」である。中国に長期滞在して儒教などを学んだ後、帰国して王府の高官となった人物で、優れた漢詩人でもあった。1714年（正徳4）に琉球使節の掌翰使として参府し、幕府儒官の新井白石（1657-1725）と会見して「文章之士」と評され（『南島志』巻下、官職第三）、帰路には著名な文人であった公家近衛家熙⁽²¹⁾（1667-1736）の依頼により漢詩を作成・送呈し、家熙から自筆の書などを贈られている（『程氏家譜』名護家、7世順則）。また名護親方が福建で自費版行した儒教的道德書の『六論衍義』⁽²¹⁾は、島津氏を經由して1719年（享保4）に將軍吉宗に献上され、その命により作成された和訳本が1722年に『六論衍義大意』【図5】として刊行された〔角田 1984〕。この書は藩校や寺子屋に広く普及したことから、「程順則」の名は日本でもよく知られることとなった。

こうした経歴から、名護は死後、琉球において、中国的教養を高度に身に付け、かつ儒教的な徳を備えた高潔な人物として「偉人」化する〔田名 1998〕⁽²²⁾。その背景には、18世紀に首里王府が儒教



【図5】『六諭衍義大意』

(沖縄県立図書館蔵) [請求記号 SK/15/H27/]

CC BY 4.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

冒頭に「六諭衍義は、琉球の程順則といひし人、其国に印行しけるを、はるかに我邦にも伝へ来れり」とある。

(朱子学) を体制教学として積極的に導入したことがあった。⁽²³⁾ 中国・日本との二重の主従関係を両立するという状況下で、琉球は自らのアイデンティティを模索し、最終的に“儒教的規範に叶った王国”という「自画像」を追求・構築する選択をしたのである [スミッツ 2011]。⁽²⁴⁾ いうまでもなく儒教は、中国はもとより日本でも通用する東アジア世界のグローバルスタンダードであった。江戸への使節参府は、王府にとって、この「自画像」を日本社会に示す好機であった。そのことは1806年(文化3)の江戸参府に際して、久米村人に対して出された王府示達の、次の部分から如実にうかがえる。

とりわけ古波蔵・当間は儀衛正・楽師としてまもなく江戸へ派遣されるので、詩文・手跡にとりわけ精を出すべきである。この二役は和朝でも儒者と心得、諸国大儒の面々からも色々作為の交流があるだろうので、その場で少しも支障がないように十分熟練していなくてはならない。⁽²⁶⁾

つまり王府は、単に優れた漢詩や書の作成を求めたのではなく、“儒者として、日本の大儒者と交流し得る”ような水準での作成を要請していたのであ

る。訓令の第10条で王府が名護親方を模範として例示したのも、同様の文脈によるものであろう。

総じて王府は訓令において、使節人員に「唐風めいた」挙動・作法——少なくとも礼に叶ったふるまい——を求め、久米村人には儒教を中心とした中国的教養を研鑽・発揮することを期待し、それによって“儒教的規範(つまりは「礼」)に叶った王国”という御外聞(国の評判・名声)を得ようとしていたといえよう。その意図は日本側には必ずしも伝わらなかったかもしれないが、中日に二重に臣従しながらも東アジア世界の一王国であり続けた琉球にとって、小国ではあるが儒教的文脈においては十分に秀でているという国家アイデンティティ/政治イデオロギーの発揚の場として、江戸参府は極めて重要な意味を有していたのである。

4. 上月行敬の描いた琉球人行列と江戸

前述してきたように、琉球人の参府行列は幕府・薩摩藩・首里王府という三つの権力による「演出」が交錯する政治的な「舞台」であった。⁽²⁸⁾ 幕府は異国にも及ぶほどの自らの「御威光」を、薩摩藩は異国を支配する自藩の権威を、首里王府は自国の儒教的権威を、それぞれ“見せ”ようとしたのである。では、こうした「演出」を“見せられた”観衆の1人である宇和島藩士・上月行敬は、それをどのように受容・消化ないしは消費・活用したのであろうか。

行敬の絵巻の第1巻に当たる『琉球人行粧』の序(以下1巻序と略記する)は「中山の聘使、貢物をさへけて江城に至るの日」と書き起こされている。第3巻である『琉球人往来筋賑之図』の末尾に記された跋文でも両絵巻は『中山使聘礼之図』と総称されており、幕府が政治的に醸成した世界観(いわゆる日本型華夷観念)⁽²⁹⁾のなかで、行敬がその「演出」をそのまま受け止めていたことがうかがえる。琉球人については「うるま人(琉球人)の行伍のさま整々堂々善尽し美尽して、常にしも見ぬ異国人のさまもいとめづらしく、一時の壯観とやいわん」(1巻序)とあり、王府の「演出」の最低ライ

ン、すなわち「礼に叶っている (=無礼・無作法ではない)」という点のみは伝わっていたといえるかもしれない。またこの部分には、日本人が目にし得る異国人が琉球人にほぼ限定されていたという当時の状況も反映されているように思われる。なお薩摩藩に関しては序・跋文ともに言及がない。

一方、「常にしも見ぬ異国人」の珍しさゆえに、琉球人行列に集まる見物人の様子を、行敬は「貴となく賤となくむれつどひて賑ふさま、実には大都の盛大なる事、目を驚かし、ことの葉にも述べかたし」(1巻序)と記している。この琉球人の参府という「見世物」によって大都江戸が賑わいがいや増すさまも、異国人=琉球人の使節行列とともに、行敬の絵巻の主題となった。これらを「古郷の児輩に見せしめんと欲する」(1巻序)ゆえに、行敬は嘉永4年(1851)、江戸の宇和島藩上屋敷において『琉球人行粧』2巻・『琉球人往来筋賑之図』1巻の計3巻を作成したのである(以下、それぞれ第1・2・3巻と略記する)[丹羽2017]。

動機については跋文に「辺土の幼稚こども二粗都会ほぼ(えと)の形状をもしらしめん」ともあり、江戸から遠く離れた宇和島藩(現在の愛媛県宇和島市)の児輩(30)／幼稚という「観衆」に江戸の様子を“見せる”ことが強く意識されている。そして実際に江戸に関しては、彼らに“見せ”たい事物が、選択的に——時に「現実」を越えて——描かれている。例えば第3巻の芝口一丁目を描いた場面(本書Ⅲ-5)では、「恵美須や、尾張なれとも店の様子、此所へ画く」と断りつつ、実際は尾張町にあった呉服店糸びす屋を描いている。また同巻にて琉球人が通過する幸橋を描いた後には、「右幸橋見附ハ外側をみる所を画しゆへ、又神田見附杯の橋掛り之趣、且前向の見附を左に画く」として具体名のない「橋と見附」が描かれるが(本書Ⅲ-9・10)、これは実在する複数の要素を組み合わせで作成された架空の光景である可能性がある。

なお第2巻の最後に「右行粧跡あとにぎハ振ひ并幸橋見附之図、次之巻ニ記ス」とあることから、本来、絵巻

は幸橋の場面(本書Ⅲ-8、【図6】A)で終わる予定であったと考えられる。後続の「橋と見附」(本書Ⅲ-9・10)および麻布龍土の宇和島藩上屋敷(本書Ⅲ-11・12・13)は、「古郷の児輩／幼稚」に“見せ”たい動機に押される形で描き加えられたのであろう。そのことは上屋敷に関して「御国許御家中幼稚之輩江戸龍土御屋敷前の趣をも拝見致さんと筆序に又爰こゝに載す」と記されていることから推察できる。

最後に絵巻全体を通じて、極めて重要と思われる特徴を1点指摘しておきたい。それはこの絵巻には①「行列の通過前」(町の様子)、②「通過時」(行列そのもの)、③「通過後」(町の様子)という連続性のある3場面が描かれているという点である【図6】。

①の「行列の通過前」の場面は第1巻の冒頭に置かれ、行敬の言によれば「琉球人往来町筋見物座敷の趣」(第3巻の巻頭言)である。具体的には、芝口一丁目方面から下城する使節が近づくのを“待つ”芝口二丁目(【図6】B)の様子が描かれている。東海道沿道の本店には座敷が整えられ、店の前には仮設の柵(ち)などが設置され、屋内外の見物人は芝口一丁目の方を眺めている。しかしまだ道内には通行人が往来していることから、使節通過まである程度の時間があつた段階の状況を描いたものと推測できる。なお嘉永3年(1850)10月13日付の大目付触書では「行列を三町程先に見かけたら往来の者を差し留める」ことが指示されていた(『通航一覽続輯』巻4)。

②の「行列通過時」の場面は、行列のみが描かれている。まずは使節を先導する「薩州様御行粧(薩摩藩主行列)」として薩摩藩主・嫡子・留守居が描かれる(留守居より第2巻に入る)。その後少数の薩摩藩士に挟まれた琉球使節が儀衛正・路次楽人・掌翰使・正使・副使・賛(讚)議官・楽正・楽童子・正使従者・楽師・正使使賛(讚)の順で続き、さらに挟箱・合羽籠・備鎗・薩摩藩側用人・藩家老・提灯・弁当までが描かれる。琉球使節の役職



【図6】 絵巻に描かれた町筋
『尾張屋板江戸切絵図』「芝口南・西久保 愛宕下之図」部分

(国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより) [請求記号：本別9-30]

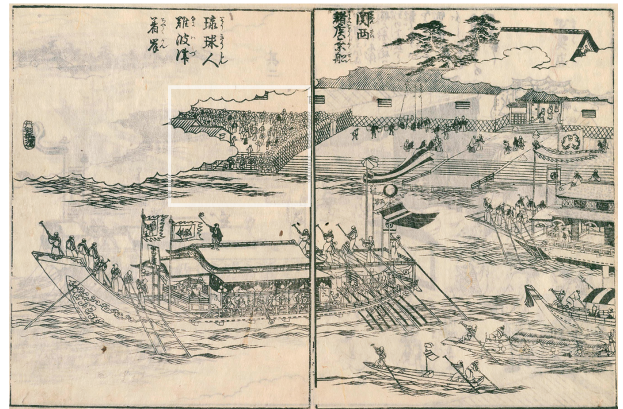
名や名前なども書き込まれていることから、行敬が別途何らかの使節情報(例えば「琉球物」)を参照していたことがうかがえる。

③の「行列通過後」の場面に該当するのは、第3巻前半の「琉球人往来筋脈の図」である。その巻頭言には「琉球人往来町筋見物座敷の趣ハ初巻二画たれハ略之。此巻ニハ江戸市中店の有様又ハ立商ひ杯の体を見せんため、芝口一丁目、新橋と松坂屋横町と幸橋迄を記す」(【図6】C)とあり、続いて「琉球人往来筋脈の図」・「幸橋見附之図」が描かれる。巻頭言を見る限り、これらは使節が通過する道筋(芝口一丁目)を用いて日常的な「江戸市中の店・立商の様子」を描くものであり、使節そのものとは無関係のようにみえる。

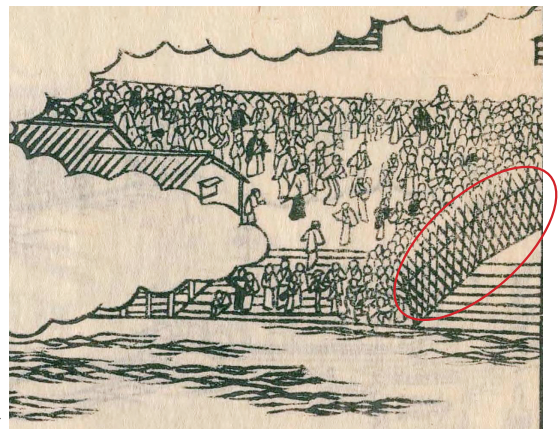
しかし第2巻の最後には「右行粧跡^{あとにぎハ}振ひ并幸橋見附之図、次之巻ニ記ス」とあり、第3巻の構成と対応させると「右行粧跡振ひ(之図)」は「琉球人往来筋脈の図」であることがわかる。辞書によれば、「あとにぎわい(後賑/跡賑)」とは、旅立ちや嫁入りを送り出した後に催される酒宴のことだが、



【図7】 芝口一丁目の竹矢来



【図8】 難波津(大坂)の竹矢来



部分

秋里籬島編『摂津名所図会』(1798年)巻5(大坂部四下)「琉球人難波津着岸」(国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより) [請求記号：839-77]

竹矢来の外側に多くの見物人の姿が確認できる。

橋口巨氏が嘉永4年(1851)の江戸の神輿等の行列の例を挙げて指摘するように、少なくとも祭礼行列には飲食の出店などを伴う「あとにぎわい」と称する盛況が付随していたとみられ、琉球使節の通過後にも同様の状況が生じていた可能性が高い。

ひるがえって「琉球人往来筋脈の図」を見ると、芝口一丁目の左手に青々とした竹矢来と、その外側から道内(町内)を眺める人々がみえる(【図7

囲み内、本書Ⅲ-7)。矢来は、使節通過時における道内への立ち入り規制のために設けられた臨時の柵であり（【図8】も参照のこと）、この規制は使節通過後もしばらくは続いたであろうから、ここに描かれているのは、矢来の外側から芝口二丁目方面に去りゆく使節を見送り、（道内に入れないうま）たたく見物人であろうと推測できる。すなわちこの部分は、行列通過「直」後の場面なのである。

これらの人々は、規制が解かれると、恐らく一斉に道内へと入り路上を賑わしたのであろう。そしてこの人出を当て込んで、立売・振売・大道芸などもまた路上に集まってきたに違いない。行敬のいう「行粧跡あとにぎは振ひ」とは、こうした状況を指すものであったと考えられる。

ただし行敬はこれをそのままには描かず、行列通過時ではない「江戸市中の賑わい」の光景と重ねる形で描いている。それは①巻頭言にあるように、第1巻で描いた見物座敷の趣（使節通過時の町筋の様子）との重複を避けるためであり、また②出店や大道芸といった共通の要素の存在ゆえに「市中の賑わい」に「行粧跡振ひ」をある程度仮託することが可能であったためであろう。一方で、「行粧跡振ひ」の起点である行列通過「直」後の場面を省かず、

「市中の賑わい」に（やや不自然ながらも）「合成」している点からは、「行粧跡振ひ」を不足なく表現しようとする行敬の意図がうかがえる。

琉球使節の「通過前」および「通過中」の市中の様子を描いたものとしては、天保3年（1832）の謝恩使の名古屋通行を描いた小田切春江の『琉球画誌』が知られる（本書Ⅳ-8参照）[横山1979]。しかし春江は残念ながら「通過後」の様子までは描いていない。朝鮮通信使に関しても「通過後」を描いたものは寡聞にして知らない。こうした史料状況もあり、異国使節行列の「通過後」の市中の賑わいについては、これまで殆ど検討されたことがなく、存在すら想定されてこなかった。したがってその様子を「通過前」・「通過時（※行列）」の場面とともに直接的・間接的に伝える本絵巻の意義は、極めて大きいと言えるであろう。本絵巻は、少なくとも嘉永3年の琉球人行列が、江戸の人々にとって「事前・最中」のみならず「事後」も含めたイベントであったことを雄弁に物語る。今後、近世日本社会における異国使節行列の意味を検討する際には、この3場面の総体として捉える視点が必要となるだろう。

【注】

- (1) 行粧とは「外出の際のよそおい。旅の装束。また、かざり立てること」を指す（『日本国語大辞典』第二版）。
- (2) その最たる例は、朝鮮・琉球の使節に家康を神として祀った日光東照宮への参詣を要請し、実現したことであろう。琉球使節の日光参詣は1644・49・53年に行われ、1671年以降はその代参として上野東照宮を参詣するようになった [真栄平1991、トビ2008]。
- (3) 1709年、幕府は慶賀使の派遣を「無用」としたが、薩摩藩が①琉球は小国だが清の朝貢国の中では朝鮮に次ぐ席次である（『旧記雑録』追録2、2756号）、②琉球は島津氏が武力で手に入れた国、すなわち將軍の陪臣である（同2764号）などと主張して、先例通り慶賀使を派遣することを認めさせた [紙屋1990a]。
- (4) 1710年以後、参府の際には原則として薩摩藩主一代につき一度、昇位を得るようになった [横山1987]。
- (5) 慶賀（賀慶）使は徳川將軍の襲職を慶賀するために、謝恩（恩謝）使は琉球国王の即位を謝恩するために派遣された。
- (6) 例えば豊見山和行氏や木土博成氏は、寛永21年（1644）の使節参府を（実質的な）初回とする [豊見山2004、木土2016]。
- (7) そのほかにオランダ商館長の江戸参府が毎年行われたが、彼らは合計4名ほど、しかも駕籠に乗っており、直接見ることはできなかった [松井2015]。
- (8) 18世紀末以降の日本人の最も代表的な琉球情報源は、1790年（寛政2）の慶賀使渡来に合わせて森嶋中良（1754-1809）がまとめた『琉球談』という書物であったが、この本は1719年に琉球へ渡来した清の冊封使徐葆光による『中山伝信録』に大きく依拠していた [横山1987]。『中山伝信録』は日本へも輸入され、和刻本が刊行されていた [和田2006]。

- (9) 編纂は天保9年(1838)から同12年にかけて行われた。
- (10) 中世以前の日本では、砂糖は当初異国からもたらされる高価な「薬」であり[黒田・トビ1994]、近世でも中国や琉球から輸入される舶来品であった。ただし飴売りの商品は、砂糖由来の飴ではなく、穀物やイモ類など植物のデンプンを糖化してつくった飴であるという[牛島2009]。
- (11) 伊舎堂親雲上(翁章錦)・小禄里之子(馬周詢)が、それぞれ楽正・楽童子に任命された(『翁姓家譜』伊舎堂家、8世盛喜[章錦]、『馬姓家譜』小禄家、13世周詢)。
- (12) そのほかに幕府は、従来より琉球使節を召し連れた手当として米2千俵を島津氏に下賜していた[紙屋1990a]。
- (13) 『中山世譜附卷』7、『翁姓家譜』伊舎堂家、『馬姓家譜』小禄家、『徳川実紀』(慎徳院殿御実紀)、『鎌田正純日記』、[横山1987]。『鎌田正純日記』の記載については、丹羽謙治氏よりご教示をいただいた。
- (14) 鎌倉芳太郎ノート44号(沖縄県立芸術大学附属・芸術資料館蔵)所収「(承前)江戸立之時仰渡并應答之条々之寫」[沖縄県立芸術大学2015:72-73]。なお当該史料の原本は失われている。
- (15) すなわち幅広袖長のものがよしとされたわけだが、これには長袖国(文官の国)のイメージが投影されている可能性が考えられる[渡辺2012]。
- (16) 現存している使節人員の書は、多くは中国風のものである[城間2016]。なお琉球における唐様書道は元の趙孟頫に基づくもの(※王羲之の系統)、和様書道は御家流であった[高津2010]。
- (17) 1682年(天和2)より将軍御前の奏楽の儀にて1曲だけ三線歌(琉歌)を演奏することが慣わしとなり、「かぎやで風節」が歌われた[比嘉2007]。
- (18) 松浦静山『甲子夜話』続編7によれば、この奏楽の場に少なくとも幕府奥絵師狩野探信・儒者佐藤一斎・連歌師飯昌成がいたという[板谷・金城・細井2011]。なお図4と同系統の写本として『琉球舞楽図巻』(九州国立博物館蔵)・『舞楽図』(海洋博覧会記念公園管理財団蔵)などがある[板谷・金城・細井2011]。
- (19) 当時の琉球は、王府に仕える官人およびその予備軍である士と、それ以外の農(農民のみならず商人等を含む)からなる2身分制であった。
- (20) この場合の「三十六」は「多くの」といった意味である。
- (21) 明の太祖が1397年に発布した6項目の聖諭(六諭)に対する解説書で、明末清初の文人范鏞が著した。
- (22) 「名護聖人」と称され、近世後期にはその伝記が少なくとも3本編まれた。これは琉球では異例のことである[田名1998]。
- (23) この政策を牽引したのは久米村出身の蔡温(1682-1761)という高官であった。
- (24) この「自画像」における儒教とは、16世紀末以降に久米村人を通じて中国から直輸入した儒教のみを指し、それ以前に禅僧の交流によって伝えられた日本の漢学の影響は捨象された[スミッツ2011]。
- (25) 鄭嘉訓・梁光地である。
- (26) 那覇市企画部文化振興科編『那覇市史』資料篇1-11、那覇市役所、1991年、p.767、および「稽古案文集」『史料編集室紀要』27、2002年、p.271。
- (27) グレゴリー・スミッツ氏は、首里王府の「自画像」は、儒教的な基本原理を利用して、琉球を隣接する中日2大国と道徳的に対等に位置づけるものであったと指摘する[スミッツ2011]。
- (28) ロナルド・トビ氏が、朝鮮通信使に関して同様の指摘を行っている[トビ2008]。
- (29) 日本型華夷観念については[トビ1999]を参照されたい。
- (30) 児童／幼稚として具体的に想定し得る人々については本書の解題と考察Ⅱ(丹羽謙治)を参照されたい。
- (31) 解題と考察Ⅵ(橋口巨)の注1。なお以下3段落については、この注に示された指摘と、橋口氏による直接のご教示に多くを拠っている。
- (32) 『日本国語大辞典』第二版および解題と考察Ⅵの注1。この中で橋口氏は、後賑／跡賑の語義と用例を詳細に検討している。
- (33) 解題と考察Ⅵの注1。
- (34) 行敬の絵巻で描かれた江戸の賑わいとは異なるが、ロナルド・トビ氏は、寛延元年(1748)の朝鮮通信使の渡来後に、江戸の町人が朝鮮擬きの衣装や髪型に扮して朝鮮風の歌や踊りに興じ、幕府がこれを禁じた事例を紹介している[トビ1988]。

【参考文献】(五十音順)

- 板谷徹・金城厚・細井尚子 2011「図巻「琉球人舞楽御巻物」の芸能史的考察」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要』4
- 板谷徹 2015『近世琉球の王府芸能と唐・大和』岩田書院
- 牛嶋英俊 2009『飴と飴売りの文化史』弦書房
- 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2001『沖縄県史ビジュアル版8 近世② 江戸上り—琉球使節の江戸参府—』沖縄県教育委員会(※特に小野まさ子氏による「解説」を参照した。)

- 小野忠重 1990『ガラス絵と泥絵—幕末・明治の庶民画考』河出書房新社
- 紙屋敦之 1990a「幕藩体制下における琉球の位置—幕・薩・琉三者の権力関係—」同『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房
- 紙屋敦之 1990b「琉球使節の解体」琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』5、浦添市教育委員会
- 紙屋敦之 1997「琉球使節の江戸上り」同『大君外交と東アジア』吉川弘文館
- 本土博成 2016「琉球使節の成立—幕・薩・琉関係史の視座から」『史林』99-4
- 久留島浩 1986「盛砂・蒔砂・飾り手桶・箒—近世における「馳走」の一つとして」『史学雑誌』95-8
- 久留島浩 2015「本書の構成と課題について」久留島浩編『描かれた行列—武士・異国・祭礼』東京大学出版会
- 黒田日出男・トビ、ロナルド責任編集 1994『行列と見世物』（朝日百科日本の歴史別冊9・歴史を読みなおす17）朝日新聞社
- 国立歴史民俗博物館編 2012『行列にみる近世—武士と異国と祭礼と』一般財団法人歴史民俗博物館振興会
- 城間圭太 2016「琉球を經由して江戸へ渡った中国書蹟」『公益財団法人日本習字教育財団学術研究助成成果論文集』2
- 角田多加雄 1984「六諭衍義大意前史—六諭衍義の成立と、その日本伝来について」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』24
- スミッツ、グレゴリー（渡辺美季訳）2011『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史—』ぺりかん社（原著1999年）
- 高津孝 2010「琉球、薩摩の書道交流」同『博物学と書物の東アジア—薩摩・琉球と海域交流—』榕樹書林
- 田名真之 1998「程順則と『六諭衍義』」同『近世沖縄の素顔』ひるぎ社
- ティネッコ、マルコ 2017『世界史からみた「琉球処分」』榕樹書林
- トビ、ロナルド 1988「近世日本の庶民文化にあらわれる朝鮮通信使像—世俗・宗教・生活上の表現」『韓』110
- トビ、ロナルド（速水融・永積洋子・川勝平太訳）1990『近世日本の国家形成と外交』創文社（原著1984年）
- トビ、ロナルド 1999「変貌する「鎖国」概念」永積洋子編『シリーズ国際交流1「鎖国」を見直す』山川出版社
- トビ、ロナルド 2008『「鎖国」という外交』（日本の歴史9）小学館
- 豊見山和行 2003「琉球・沖縄史の世界」同編『日本の時代史18 琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館
- 豊見山和行 2004「江戸幕府外交と琉球」同『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館
- 豊橋市二川宿本陣資料館編 2001『開館10周年記念 琉球使節展図録』豊橋市二川宿本陣資料館
- 丹羽謙治 2017「上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』について—鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図書館本のあいだ』『雅俗』16 雅俗の会
- 比嘉悦子 2007「御座楽の歌詞について」御座楽復元演奏研究会編『御座楽の復元に向けて—調査と研究』御座楽復元演奏研究会
- 平井聖（監修・執筆）・浅野伸子（執筆）2004『泥絵で見る大名屋敷』学習研究社
- 福田アジオ 2007「生活絵引編纂の世界的意義」『神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告4／第2回国際シンポジウム 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 藤原重雄 1995「行列（日本の）」黒田日出男責任編集『歴史学事典』3（かたちとしるし）弘文堂
- 古塚達朗 1993「琉球人の墓を訪ねて—江戸上りのルートをたどる—」『地域と文化』75
- 真栄平房昭 1991「幕藩制国家の外交儀礼と琉球—東照宮儀礼を中心に」『歴史学研究』620
- 真栄平房昭 1993「薩摩藩の海事政策と琉球支配」柚木学編『日本水上交通史論集』5、文献出版
- 松井洋子 2015「オランダ商館長の江戸参府とその行列」久留島浩編『描かれた行列—武士・異国・祭礼』東京大学出版会
- 宮城栄昌 1976「[江戸上り史料]中の芸能史料」『沖縄文化研究』3
- 宮城栄昌 1982『琉球使者の江戸上り』第一書房
- 横山學 1979「琉使の名古屋通行と貸本屋「大惣」」南島史学会編『南島—その歴史と文化—2』第一書房
- 横山學 1987『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館
- 横山學 2015「琉球使節登城行列絵巻を読む」久留島浩編『描かれた行列—武士・異国・祭礼』東京大学出版会
- 横山學 2017「朝鮮通信使渡来と近世末期の「唐人」像」『朝鮮通信使研究』23
- 渡辺美季 2012「近世琉球の自意識—御勤と御外聞—」同『近世琉球と中日関係』吉川弘文館
- 和田久徳 2006「『中山伝信録』の清刊本と和刻本」同『琉球王国の形成—三山統一とその前後』榕樹書林

【史料】

『翁姓家譜』（伊舎堂家）：那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇第1-7（家譜資料3）、同編集室、1982年

『鎌田正純日記』：鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 鎌田正純日記』3、鹿児島県、1991年

『旧記雑録』追録2：鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 旧記雑録追録』2、鹿児島県、1972年
『尚泰侯実録』：『東恩納寛惇全集』2、第一書房、1978年
『中山世譜附卷』：『琉球史料叢書』5、東京美術、1972年
『通航一覧続輯』巻4：箭内健次編『通航一覧続輯』1、清文堂出版、1968年
『程氏家譜』名護家：那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇第1-6（家譜資料2下）、同編集室、1980年
『徳川実紀』（慎徳院〔家慶〕殿御実紀）巻14：『徳川実紀』第3編、経済雑誌社、1906年
『南島志』：新井白石（原田信男校注）『蝦夷志 南島志』（東洋文庫 865）平凡社、2015年
『馬姓家譜』小禄家：『翁姓家譜』（伊舎堂家）に同じ